

スペッコ便り 2024

佐々木健

2024 年 6 月 28 日・29 日の二日間、ウンブリア州の古都スペッコにて、「コンスタンティヌス大帝期ローマ法学会、円卓会議 2024」が開催された。前便（スペッコ便り 2022、本誌 4 号）で触れた、昨年開催の第 26 回国際大会では、「“コンスタンティヌス大帝期〔ローマ法学会〕”の 50 年のために：バランスと見通し、対話の中の東西」と題し、古代末期研究との関わり、元首政の持続、勅法、「異教徒」、元老院政治、皇女、ギリシャ世界、永小作、碑文、外交関係、経済と流動性など、興味深いテーマを論じる報告が並んだ。

今般の円卓会議は、前回で挙げられた 4 テーマのうち、「古代末の法世界における女性」が掲げられた。上記国際大会までは資料がウェブサイトに掲載され本邦からもダウンロード可能であったが、今般は完全対面のみで開催に戻り、遠隔で知り得る情報はかなり限定された。以下は、会場で接した報告内容を要約したものである（F. Zuccotti 教授創刊のオンライン雑誌 *Rivista di diritto romano*, 24 には、イタリア語での紹介文がある。<https://doi.org/10.7358/rdr-2024-lan>）。

円卓会議での慣例に従い、冒頭で会長 Navarra 教授や市長の挨拶から始まり、市民生活、健康、ディオクレティアヌス帝との関係、夫死亡に伴う書面実務といったテーマが提示された。逐次、発表者の名を挙げることはしないが、女性の娘としての地位、所有（帰属）主体としての相続問題、母による介入、刑事実体法とキリスト教による変化、学説彙纂 *Digesta* から勅法彙纂 *Codex* への視座転換とパラレルな法学者著作（法学大全 *Digesta*）から官房書記局での取り纏

め（巻物 Codex での整理）、そこに見出される子の分娩・出産という女性特有の問題が扱われ、話題は新勅法 Novellae に見られる胎児保護のための占有付与と虚偽申告、同時に貧困に対する社会的関心へと発展した。随時、Teams を用いて遠隔報告も行われた。所有者が男性ばかりでなく女性にも広がった点、教会・カノン法との相違、尊厳、暮らし向き（QOL）、経済との関係、ゲルマン系諸族との文化的混淆（木造家屋、食事）、修道院などイベリアの状況、西ゴートの特徴（刑事法への傾斜）、学際的研究の必要性、東部の独自性（自律性）、女性蔑視（ミソジニ）、公共空間での在り方、といった論点が整理された。いずれも、次年度の国際大会で詳述されよう。

* * *

なお、往復には、アリタリアの後継としてコロナ禍後に運航を開始した ITA エア・ウェイズを利用した。コードは依然として AZ であり、便名も馴染みある数字が並ぶ。羽田発ローマ直行で、快適な空旅で、欧州映画を鑑賞した。夜間に到着したテルミニ駅前の（安）宿は、固定されたシャワーから水しか出なかったが、スペッロ往復する間、スーツケースを預け、スタッフも快活であった。スペッロでの「定宿」も含め、インターネット環境は整っており、執筆関連作業も効率的に進んだ。ところが、ローマに戻り、土産を買い込み、重くなった荷物を抱え電車でフィウミチーノ空港に到着すると、数日前からのオーバーブッキングが連鎖して、予定の便に乗れないとのこと。偶然に後ろに並んだ学生さんと、旧市街方向へ半分ほど戻る位置にあるホテルまでクーポンでタクシー移動となった。四つ星で、バスタブに温水を溜めて入浴できる幸運に恵まれた。研究会報告の準備など順調に整える機会ともなった。今回は、クリフォ教授

ご夫妻への墓参を済ませて空港行き電車に乗り込んだのだが、先生のご加護が効いたのか利かなかったのか。無事、帰国し、新幹線から多少の遅刻を予告して、学部講義と続けての演習に臨むため、車内のトイレでスーツに着替えた次第である。

次は、第 27 回国際大会が予定される。古代末の実相が解明されるものと期待される。各位の参画が得られれば幸いである。